

臨床脳波学 第6版

大熊 輝雄, 松岡 洋夫, 上埜 高志, 齋藤 秀光【著】

評者

松浦 雅人

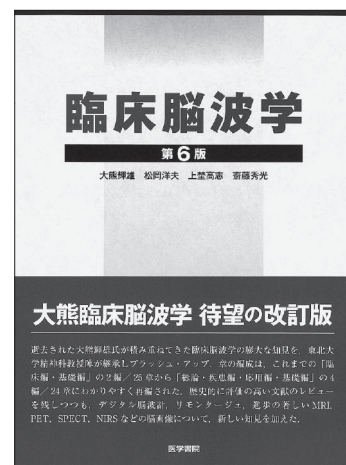
田崎病院副院長／東京医科歯科大学名誉教授

今般, 松岡洋夫教授, 上埜高志教授, 齋藤秀光教授のご努力により『臨床脳波学』が17年ぶりに改訂・出版された。故・大熊輝雄先生が原著者の本書は, 日本の脳波診断学を高い水準に引き上げた名著である。20世紀の終わりに出版された第5版が最終版と思っていたので, 今回の出版は大いに感激するとともに驚きもあった。「まえがき」を読むと, 大熊先生は2005年に東北大学の後輩3教授に本書の改訂を依頼され, 2010年に逝去されたとのことである。1963年に出版された本書の初版には, 秋元波留夫先生が序文を寄せて, 「脳波の歴史はまだ大変に浅いが当時の知見を集大成した力作である」と書かれた。その後, 大熊先生はお1人で臨床脳波学に関する国内外の膨大な知見を網羅し, およそ10年単位で4度にわたって改訂し, 36年間にわたるご努力で重厚な教科書を作られた。その大熊先生に後事を託された3名の精鋭教授が21世紀に『臨床脳波学』をよみがえらせたわけである。

『臨床脳波学 第6版』では, これまで「臨床編」と「応用編」の2編(25章)であったものを, 「総論」「疾患編」「応用編」「基礎

編」の4編(24章)にわかりやすく改編した。また, 統合失調症, 認知症, 知的障害などと名称変更された疾患も少なくなく, 学会名も「臨床神経生理学会」となったため, これらを更新・統一している。そして新しい知見を追加するとともに, 古い内容を削除して全体の頁数を変えない工夫がなされている。引用文献を残すものと削除するものに仕分け, 新たな文献を追加する作業だけでも大変な努力であったと推察される。削除された章はMEや電気の基礎知識に関するもので, 臨床工学技士や臨床検査技師が専門とする領域である。医師はこれらの専門家と協力・分担して神経生理学の臨床を行う時代になったと言える。

今回の改訂では, 臨床脳波学の最近の動向として, デジタル脳波計と電子ファイリングの一般化, 画像診断と統計解析法の発展, 学会認定医・認定技術師制度の発足などが総論に追記されている。「疾患編」では, 脳腫瘍, 脳梗塞, 硬膜下血腫, 認知症などの脳波図が更新され, 画像所見も追加されたために理解が容易となった。睡眠障害の章(第11章)では, 眠気の計測法やナルコレプシーの診断に関する最近の知見などが追加され



た。神経発達障害や精神疾患の脳波の章では, 新たな精神疾患分類名に基づいて知見が整理されている。「応用編」では新しい脳波分析法, 高密度脳波, 高周波振動, BMI/BCI, 脳機能画像などが解説されている。

近頃は臨床脳波を正確に判読できる医師が減っていると聞く。大熊先生は本書の初版で, 「脳波を知る最も良い方法は, 自分で電極を付けて脳波をとってみることである」と述べておられる。この原則は今も変わらず, すべての医師は医学生時代に脳波実習を経験したはずである。医師になってからは本書を手にして臨床脳波学の豊富な知見に接して, 脳波を正確に判読できる医師になってもらいたいと願ってやまない。

B5・頁724

2016年11月

定価: 本体18,000円+税

[ISBN978-4-260-01449-6]

医学書院刊